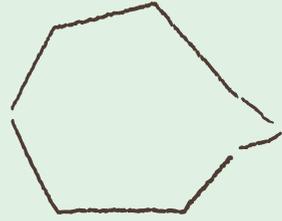


# #7



## 「表現未満、」を 話す、聞く

アーダ・コーダ・ソーダ! どうだ?  
～ 17人のスタッフとトーク大回転～

レッツのスタッフ 17 名が一人ひとりホストになり、各スタッフの興味関心を軸に、参加者と少人数で語り合うイベントを開催した。30 分のトークセッションを 3 回行い、参加者には各回で別のスタッフのもとで話を聞いてもらった。5 名のゲストを招いて参加者とともにトークに参加してもらい、内容を共有するゲストトークを行ったあと、参加者・ゲスト・スタッフが自由に話すフリーセッションの時間を設けた。講演や報告書とは違う、それぞれのスタッフの語りからレッツの活動を知ってもらい、また参加者からも話を聞けるようにイベントを企画した。



・支援し他へ非営利の支援について  
考え直す食域へ  
・超千代目〜自分正直なクライアントたちへ  
・気さくさく〜気さくさく〜お世話が生まれていく  
高林洋臣

・なるべ〜自責代表せよに自分の  
ことをまっぴらに返さ  
・なんでも家族にこぼれている  
・くっつきすぎたわ  
石山律



・表現と  
現場と  
木越種人



・OGA奮闘大作戦 決起集会  
・WLB? WorkLifeBalance  
BADASS!!!  
・遊・たけしと生活研究会  
ササキコーイチ

・アクトサイン からの脱却  
・夢と可能性  
・テーマと乖離の現実  
若尾亮介



・見火陸生  
・新人と話す、紙とペンで  
・文化とはなんですか?  
・あなたに、  
非言語コミュニケーション  
を教えますか?  
ガッ!



・何年代、どの層、どのこと、福祉「障害」「高齢者」  
・夫も知らない、おじいさんの音楽  
・レインと障害者社会支援法〜念想的事務ログト〜  
・教育界に希望をこぼす  
夏目好子



・現場で湧き上がる  
・首の興味について  
首藤利祐



・生きて大変な仕事...  
・「あなた」を通して「わたし」を見た!  
・「自分」はな〜るに居る、ほんたに面白いよ。  
山本大

ア・ダ・ユ・ダ・ソ・ダ! どうだ? ~17人のスタッフトーク大回覧へ~



・坂本千花  
・生活と浸透力  
・孤独について  
・ないを食べと生まれるか?



・「子どもの居場所」はどうなる?  
・レイン、ほせ  
・仕事はたらく→何ぞ? 何のみに? 何したい?  
せつたい? いつまで?



・高木鞠子  
・生活と表現の大切さについて  
・遠くまで売外に近しいに3にあるのに  
届かない問題  
・レインとは考え難い、問い直さないと止まらない  
修行をみつけている!!!  
・スタックありレジと「ア・ダ・ユ・ダ・ソ・ダ!」だ?  
(フリーター科)



・竹内聡  
・凸凹まわりとかクライアントとかが、ままして



・たけしが結構懐かしさをもらいたい  
・生存戦略としての福祉とまちづくりと銭湯計画



・外に出ると  
・好きな食と生きるための食について  
・こたわること  
柳井喜希理



・菊池実「父帰るから  
着る不衛生と家族  
・合衆国でも国子と心得ること  
・おれも不衛生、これ不衛生  
をわけて福祉社かも?」を  
プレストしてみる。  
尾張美穂



・好きなこととエバロメント  
・こたわりとストレングス  
・ズルオの正体  
内田翔太郎

# アーダ・コーダ・ソーダ！どうだ？

～17人のスタッフとトーク大回転～

クリエイティブサポートレッツ（以下、レッツ）は、多様な人々がお互いを尊重し共に暮らせる社会を目指して、アート・福祉・まちづくり・教育などの分野で活動をしています。各分野の文脈に沿ってレッツの活動を紹介する機会がよくありますが、伝わりやすくとめた事例発表では抜け落ちてしまう、種々雑多なスタッフそれぞれの経験や実感を知ってもらうことも必要だと感じてきました。

そこで、レッツのスタッフ17人が一人ひとりホストになり、参加者と少人数で語り合うワークショップを開催します。30分のトークセッションが3回あり、それぞれ別のスタッフと話すことができます。また各方面で活躍するゲストの方々にもトークセッションに参加してもらい、その感想をシェアしてもらうゲストトークも用意しています。

レッツのスタッフに限らず参加者の皆さんも、重要だと分かっているけど後回しになっていることや、世間にとっては些細なことだが自分にとっては大切なことなど、日々の生活から生まれるモヤモヤを抱えていると思います。あらゆることが専門化し分断されていく社会の中で、大きな話ではなく、個人個人が自分自身の語り方で話すことに可能性を感じています。皆さまのご参加お待ちしております。（チラシ本文より）

## イベント概要

日時：2024年2月23日（金・祝）11:00～18:00

会場：たけし文化センター連尺町（静岡県浜松市中央区連尺町314-30）、  
ちまた公民館（浜松市中央区紺屋町217-30）

定員：70名（事前申込・先着順）

主催：文化庁、認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ

文化庁委託事業「令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業」

## タイムテーブル

- 11:00～ オリエンテーション（10分）
- 11:30～ スタッフトークセッション①（30分）
- 12:20～ スタッフトークセッション②（30分）
- 12:50～ 昼休憩（70分）
- 14:00～ スタッフトークセッション③（30分）
- 14:50～ ゲストトーク（60分）
- 15:50～ フリーセッション（交流会）（130分）
- 18:00 終了

## ゲスト

青木彬（インディペンデント・キュレーター、一般社団法人藝とディレクター）  
アサダワタル（アーティスト、文筆家、近畿大学文芸学部文化デザイン学科 特任講師）  
津口在五（鞆の津ミュージアム キュレーター、生活支援員）  
辻琢磨（合同会社辻琢磨建築企画事務所 代表）  
中田一会（マガジンハウス〈こここ〉編集長、きてん企画室 代表）  
※敬称略・50音順

## 17名のレッツスタッフ

石山律、内田翔太郎、尾張美途、久保田瑛、櫻井喜維智、ササキユイチ、佐藤啓太、杉田可縫、曾布川祐、高木路子、高林洋臣、竹内聡、塚本千花、夏目はるな、水越雅人、見山陸生、渡邊亮介 ※50音順

## トークテーマ

スタッフがそれぞれ複数のトークテーマを出しています。

なるべく自責・他責せずに自分のこれまでを振り返る／なんだか家族にこだわっている／ぐっときてすぐに忘れる／好きなこととエンパワメント／こだわりとストレングス／ズルさの正体／菊池寛「父帰る」から考える福祉と家族／合意形成を図ることと得ること／あれも福祉、これも福祉「それって福祉かも？」をプレストしてみる／たけしから結婚祝いももらいたい／生存戦略としての福祉とまちづくりと銭湯計画／外に出ること／好きな食と生きるための食について／こだわること／OGA 奪還大作戦・決起集会／WLB? Work Life Balance BADASS!!! / 超・たけしと生活研究会／生きるって大変だなあ・・・。／「あなた」を通して「わたし」を見た！／なんとなく一緒に居ると、なんだか色々面白いよっ。／「子どもの居場所」って どうつくる？／レッツっぽさ／仕事、はたらく→何で？何のために？何をしたい？ぜったい？いつまで？／現場で湧き上がる哲学的興味について／声について／生活や表現の大切なことって遠いようで意外と近いところにあるのに届かない問題／レッツとは考え続け、問い直すことを止めない修行とみつけたり!!! / スナックありじごく in アーダ・コーダ・ソーダ! どうだ？／支援と利他～非支配的な支援について考えるケース会議～／超・デザイン～自分に正直なクライアントたち～／気をすませ／気をまぎらわせながら生きていく／凸凹まつりとかクラブアルストとかやってまして／生活と演劇／孤独について／なにを食べて生きていますか？／何年やっても慣れないことば「福祉」「支援」「障害」「まちづくり」／夫も知らない、ひとりの音楽／レッツと障害者総合支援法～創造的シゴト～／教育界に絶望したくないけど時々絶望／表現と居場所と現場／新人と話す。紙とペンで。／文化とはなんですか？／あなたにとっての非言語的コミュニケーションを教えてください。／アウトサイダーからの脱却／夢と可能性／テーマと乖離する現実











#7 「表現未満、」を話す、聞く

## 参加者の感想

column

全部に参加不可能だから、  
深く・濃い想像が濃く広がる  
渡辺勇士（大学教員）・・・・・・・・・・ 238

ままならぬ『支援』への抵抗としての  
あーだこーだ  
高本友子（ライター）・・・・・・・・・・ 240

ただ聞き、  
これまで考えなくてよかったことを考えた  
日賀優一（教育ライター）・・・・・・・・ 242



## 全部に参加不可能だから、深く・濃い想像が濃く広がる

渡辺勇士（大学教員）

こんにちは。渡辺といいます。東京に住んでいます。レッツは2012年から2013年にはじめて訪問して、その後、第一回の「スタ☆タン!!」で「スタ☆タン!!」のファンになり、イベントがあるごとに行ける限り浜松に訪問しています。なんで浜松まで行くのか? 「スタ☆タン!!」もそうだったんですが、チラシや広報の文章を読んだだけでは何が起るのかがまったくわからないからです。行って、そして、見ないと理解ができないからです。「スタ☆タン!!」は一言で言えば「一般人がステージに立つイベント」だし、この「アーダ・コーダ・ソーダ! どうだ?」も一言で言えば「17人の職員が話す」だけじゃないですか。絶対にイベントとして成り立たないじゃないですか? でも、なにか臭うし、行ってみるとすごい体験があるわけです。それは浜松に足を運ばせる程の信頼になっているわけです。

職員のトークセッションは3回あって、会場が12箇所にレイアウトされていました。その都度お客さんは割り振られた場所に移動してそこにいる職員の話を書く、というシステムです。最初から「いやあ、考えたこのシステム」って感じでした。トークでは、それぞれ担当の職員ごとのテーマが決まっています。私が参加したトークは1人目が「食」、2人目が「家庭」、3人目が「孤独」がテーマだったと思います（私の解釈です）。「食」の話では管理としての「食」と、幸せを分かち合う行為としての「食」の違いでの職員の方のゆらぎを見ました。「家族」の話では就職した経緯と、自分自身の「家族」の問題、そして、レッツの「家族」に対する問題への対峙の仕方と、自分の「家族」に対する問題への対峙の仕方のゆらぎを見ました。「孤独」の話では自分がわかってもらいたいこと、他者にわかってもらうこと、他者をわかること、自分がわかりたいこと、そういうゆらぎを見ました。どのトークも非常に面白かったです。そして、それぞれのトークではときに参加者がちゃちゃを入れたり、職員の方から参加者への投げかけもあったり、参加者同士もどういふ経緯でこの場所に辿り着いたのかも垣間見ることができました。

本イベントは「前に出て代表の人が話して終わり、参加している人も聞くだけで終わり」のシンポジウム的なイベントに対してのアンチテーゼである、というような話を聞きました。3人のトークセッションを通して、私が聞いた職員3人だけでもこんな濃く、全く違う話をしているのであれば、

他の14人も同じように別のテーマで、別の角度の濃い話をしているのであろう、という想像力が働きました。そして、その「語り」は同じ「たけし文化センター」という場所で働いている状況から生まれてきています。一般的に、普通に会社で働いている人にとっては、自分の職場と自分の関係で、人に「語りたいこと」や「語れること」ってそんなにはないと思います。でも、17人がこんなに多様な「語り」ができる状況を作るベースにある「クリエイティブサポートレッツ」ってすごいな、って思いました。また、「語る」っていうのは一つの表現だと思うのですが、語れるくらいに熱意を（本位でも不本意でも、または持ってしまって、または持たされて）働いている職員たちすごいな、と改めて感じました。そしてそして、そんなスタッフの話を知りたいと思って来てしまった60人の人達（お客さんだけで60人くらい来ていました。浜松近辺の人だけじゃなかったと思います）すごいな、と思いました。という意味で、代表者が話すだけのシンポジウムとは違う職員の人達の凄さ、それを培っている場所の凄さ、そして、これを聞こうと思って人がわざわざ集まる参加者の凄さまでもが、感じられたイベントでした。ステージを立てたイベントではなく、スタッフが同時時間に複数の場所でパラレルに話す、という形式をとることで、はっきりと面としてそこに生きている職員、そして、そこに関わる・関わりたい人がいる空間の豊かさが見えた気がしました。

あと、これも面白いなあと思ったんですが、全員の話聞いていないからこそ、1つの代表がなかったからこそ、私の中で（参加者の中で）、私が（参加者が）勝手に大事にしたい「たけし文化センター」の役割とか機能を（勝手に）想像することを許してもらえた気がしました。ゲストの人がゲストトークで「3人の話を聞いて共通のテーマがあるように感じた」と言っていたが、これは共通のテーマがあるんじゃないかと思いました。当然同じ職場で働いている人たちの話を聞いているから、共通の問題意識とかもあるんだろうけど、参加者が全員の話聞いていないから、聞けない状況だからこそ、自分の問題意識で紐づけて（勝手に）見てしまう「たけし文化センター」の像っていうのが強く・濃く持てた気がします。多分私の場合は「ゆらぎ」とか、価値を「考え直す」ことだったと思います。

そして、参加者の人はそれを持ち帰る。そりゃ、「アーダ・コーダ・ソーダ! どうだ?」でなかったとしても、普通のシンポジウムでも、一つの同じシンポジウムに参加しても、おそらく一つとして同じ感想をもって帰る参

加者はいないと思います。でも、この「アーダ・コーダ・ソーダ! どうだ?」では、違うのは当然なんだけど、それが「深く」違うというか、より「濃く」違うというか、そういう状況で参加者が帰ったんじゃないかと思えます。このより「深く」「濃く」違う体験を持ち帰った参加者がこの後どういう動きをするのが楽しみです。

あ、でも実は「アーダ・コーダ・ソーダ! どうだ?」の中で、最後の2時間は交流会として用意されてて、参加者同士のフリートークタイムでした。多分、そのバラバラとか深い感想を参加者同士で話し合う時間だったんだろうけど、私は多分話すのが嫌だったんだと思います。いや、DJがかっこよすぎたんだと思います。2階に用意されたディスコ会場ですと2時間踊り続けてました。DJのせいです。交流会で参加者のほかの皆さんとお話していたらまた感想が変わっていたかもしれません。

いや、とても楽しい一日でした。そして、この多人数同時一斉トークシステムは使える! と思えました。どっかで真似してみたいです。本当、毎回想像の斜め上をいく形式の人の集団の流れを見せてくれます。今後よくわからないイベントを期待しています!

.....



### ままならぬ『支援』への抵抗としてのあーだこーだ

高本友子 (ライター)

私が「レッツ」を初めて訪問したのは、3年前のことになる。たけし文化センター3階のシェアハウスに泊まり込み、重度知的障害者のシェアメイトと刺激的な1か月を過ごした。その後もたびたび訪問しているが、「レッツ」はいつも変わらない。というより、私がここでいつも感じ取ることがある。

「その人らしさを肯定しようとするままならなさへの、抵抗」である。

文化・アートの事業体として、その二つの単語で注目されているレッツだけど、その創造の源流というか根底には、思っている以上に(?) 真摯な支援がある。

だって、レッツのスタッフっていつ会っても大体、悩んでいる。

「利用者と上下関係になっていないか」

「健康のためとって、食のこだわりを尊重しないでいいのか」

自らの支援を顧みて、現場で熱く繰り広げられる葛藤。思いがけず支援を構造化してしまっていることへの抵抗。スタッフは悩みを言語化し、意見し合い、明日の支援を探っている。「アーダ・コーダ・ソーダ!」と言っている。「どうだ?」と個人個人と向き合って、また問いが生まれる、その繰り返し。

一方の私。3年前と状況は結構、変わった。去年秋、8年半勤めた新聞記者を辞めて、介護職に転職した(レッツ滞在後、こんなにも福祉に興味を持ってしまい、影響を受けたと言わざるを得ない)。身を投じてみて改めて実感するけど、支援/ケアって結構難儀だ。食事や排せつ、入浴などありとあらゆる個人的な生活場面に介入する。一歩間違えれば、上下関係はあつという間に出来上がる。その関係性は時に、支援/ケアを楽にしようという恐怖。ありのままを肯定なんて、1人でやるには自信が持てない。みんなで「アーダ・コーダ・ソーダ! どうだ?」って言わなきゃ、やっていられぬ。

レッツスタッフの頭ん中を覗き見る、今回のイベントは私にタイミングよく訪れた。

自身の状況も相まって選んだテーマは「ケース会議」や「福祉と家族」など、現場を踏んでいると避けられない議題。

「ケース会議」では、3年前のシェアメイトのことが取り上げられていたので、意見を求められ、発言をした。他のテーマでも家族の問題への介入の困難さとか、日々記録をすることで利用者の「像」を一方向的に作り上げていないかとか、悩みには自身と通ずる部分も多く、共感を繰り返していたらあつという間に終わってしまった。無論、各回「答え」など出なかった。

福祉業界の人だったり、そうじゃなかったり、バックグラウンドが多様な人たちとトークをしている最中、私はレッツで日々繰り返されている支

援検討の過程を目の当たりにしているんだろうなあと思うなどしていた。

レッツでは、外部の人を含めて、とにかく支援を誰かと一緒に考えている。ここが、私がレッツで感じる「ままならなさへの抵抗」なんだと思う。

「支援が思い通りにいかない、思い通りとか考えている時点で何か違う」

「その人らしさってそもそも何？」

ふとした瞬間に浮かんだ問いを、第3者に開示して悩み通す。一番身近で支援しているスタッフや家族が理解者という定説を覆そうとするがごとく、広く意見を求め、その人らしさに輪郭の強度を高めていく。そのために、レッツにはゲストが必要だし、ゲストの発言も必要だ。

今回のトークからうまれた言葉の数々は、レッツにおける支援に還元されていくのだろうし、そう願う。

もちろん、ゲストの日常へも。少なくとも私は今、「スタッフがゲストとあーだこーだトーク」というイベントをたたき出す余白をどうやったら世の福祉施設も持てるだろうと悶々と考えている。

今回のイベントに限らず、日々全国から多数のゲストを受け入れているレッツ。初の試みだったそうだが、実際発生していたトークは日頃レッツで繰り返されているものの拡張版で、かつ名前が付いたにすぎないんじゃないか、とは思った。いつだって、レッツの人々は「アーダ・コーダ・ソーダ! どうだ?」している。

.....



### ただ聞き、これまで考えなくてよかったことを考えた

日賀優一（教育ライター）

#### 印象に残ったことば

「自分も自由に生きたいのに、他者の自由を守るために自分の自由がなくなっている」「自由でずるい」

自由って何なんでしょうね。たけしさんや中村俊介さん（※ともにレッ

ツが運営する福祉サービスの利用者）は自由？不自由？そもそも僕は自由？不自由？もっとそもそも、僕は自由に生きたいの？確かにたけしさんや俊介さんに比べると僕は「自己決定」できる場面がたくさんあるように思いますが、それは自由と近いものなのでしょうか？違うような……普段考えないこと、もしかしたら考えない方がよかった問いが載っているヒミツのノートをチラ見してしまったような気分です。

#### 感想

普段の仕事の大半は、人の話を聞いて文章にすることです。でもただ聞くだけではなく、文章にすることを考えながら聞くので、聞いたことをつなげたり、分解したり、別の言葉で具体化したり抽象化したりしますし、欲しい言葉を引き出すために質問したりします。でも今回は、そういうことは極力しないでただただ聞こう、相手の真意をとりそこねてもいいので、自分が感じたことの最小限だけを口にしようと思って参加しました。スタッフの方は僕がしたことがない経験をし、生きたことがない時間を過ごしているのだから、下手に評価などせずにただ聞こうと思ったのです。でも、「僕がしたことがない経験をし、生きたことがない時間を過ごしている」のはスタッフの方だけではなく、うちのカミサンだって中3の息子だってそうなのですが……もっとすべての人に対して「ただ聞こう」という態度でいることも必要だなと思いました。

ただ聞いているだけ、「そうなのか」と聞くだけだったのに、なんだかとても疲れてしまい、交流会に出ないで退出してしまいました。聞くのはいいけど、もう人としゃべりたくない、そんな感じになったように思います。もちろんこれは3つのトークセッションがよい時間だったということです。個人的には、ゲストトークも交流会もぜんぶトークセッションの時間に充ててほしかったです。6人くらいお話を聞きたかったし、1人30分も短かった（1時間はほしかった）。でも、そんなことになったら、「とても疲れた」くらいでは済まなかったでしょうから、ちょうどよかったのかもかもしれません。

#### 渡邊さん、瑛さん、佐藤さんのお話を聞きました

渡邊さんのお話を聞いて、「仕事」って何だろうと思いました。何かに「仕」えることなのか、何か「志」を実現するためのものなのか、「私」の時間を楽しむものなのか、生きている意味を「思」う行為なのか……そこを深く考えないまま自分は仕事と呼ばれることをしてきて、たまに褒めら

れたり、回らない鮎屋でご飯を食べることができたりしているけど、それでいいのだろうか……全くうまく言えないのですが、渡邊さんのように考えている方が生きている感じがしたのは気のせいでしょうか。うちの息子には渡邊さんのように迷ってほしい、といったらヒドイ父親でしょうか。レッツという僕にとっては人生の魔境（初めて知って、実際にツアーに参加するまで5年以上かかりましたから）ともいえる場所で働く方からこんな話が聞けるなんて……まさに今回こういう話を自分は聞きたかったのだと思いました。ありがとうございます。

瑛さんのお話の中で、非常に不勉強でかつ失礼なことなのですが、びっくりしたことがあります（無礼を承知で正直に書きます）。それは、たけしさんがお父さまの死を境に「変わった」ように思える、少なくとも自分の知っているそれまでのたけしさんではなくなったということです。瑛さんは「成長した」という言葉は使わなかったと思います。それでも「変わる」のだ、ということにビックリしました。冷静に考えれば2人のヘルパーさんと過ごせること、鉛を買いにスーパーに行って納得するまで時間を過ごせること、どれもきっと前とは変わった姿なのだろうと思いますが……。変わらない、変わるはずがないなどと思っていたわけではないのですが、「変わる」ということを忘れたままたけしさん、そしてそのほかの利用者さんのことを（100時間ツアーなどで）見ていたのかもしれない。

「たけしさんからお祝いをもらいたい」というテーマ、考えさせられました。石のように固まってしまった相手からはもらうことはできないけど、変わるたけしさんからはもしかして……と書いて気がついたのですが、そもそも石のように固まってしまった人からももらうことはできるのかも……これまでもこれからもたまたま僕は考えなくてもよかったことを考える機会をもらったように思います。でも本当は、こういうことを考えないで、共生社会とかインクルーシブとか言っているから、優しさや思いやり、正義感に頼るほかない社会像しかイメージできないのじゃないか（自分のことです）。

瑛さんのお話をオンラインで聞いている横で、たけしさんと2人のヘルパーさんの姿を見ました。たけしさんには2人のヘルパーがついていることは過去の100時間タイムトラベルからも知っていましたが、渡邊さんの「だれかの自由を守るために不自由になる」という言葉を思い出しながら、2人のヘルパーさんの様子を見ていました。1対2とか経済性とか、そうしたことを全く考へなかったかと言えばウソになります。あとき、2人のヘルパーさんは不自由だったの？（場所も時間も拘束されているから不自

由？）それは仕事だから？たけしさんは2人のヘルパーさんに一方的に「もらっている」だけ？ヘルパーさんにもお話を聞いてみたかったし、結局、自分が同じように「仕事」しないとわからないのかなとも思いました。でも、そんなことはない、聞くことでわかるような気もします。ただ、それってわかった気になっただけでかえってよくないのでは？結局魔境にはまった気持ちになってしまいます。

佐藤さんのお話から、支援する人、支援の道筋をつける人であっても、自分自身を支援につなぐことはじょうずではない、という事例が見えてきて、支援は「してほしい！」と要請し、受けるものであるのか、あるいは「してあげるよ！」と声をかけてもらい、受けるものなのか、どちらがよいのだろうかと考えました。もちろんどっちもあればいいのですが、「支援が必要な人を見つける」ことは社会のしくみを充実させれば可能になるのだろうけど、「支援して！」と言いやすくするのも社会のしくみなのか、それともマインドの問題なのか……たまたま何かの恵みで今はどうやら支援が必要ではないワタシと、たまたま何かの巡り合わせで今は支援があると楽になれるアナタは、やはり対等ではないのでしょうか。支援して！助けて！（そして「ごめんなさい」「申し訳ありません」）というのではなく、手を貸して！ちょっと代わって！（そして「サンキュー！」「助かったよ！」）というほうがみんな気楽なはずなんです……きっと僕もいよいよのときは「申し訳ありません」と言いながら恐る恐る支援を頂戴しそうです。家の前の舗装された道路を歩くときは、「みんなのおかげで舗装していただきました。申し訳ありません」と恐縮したりしないのに。

ツアーで2回訪問していたので、今回のワークショップで3回目になりますが、レッツとは何か、なぜさまざまな人がそこに集うのか、そこにまぎれ込んだ自分は居心地よく過ごせるのか、なぜスタッフの人たちには（表面的にかもしれませんが僕には）暗い表情が見えないのか、やっぱり僕には何もわかりません。わかった気になるよりマシだろうと開き直るくらいしかできません。ほかの参加者の人がどう思ったのかを聞いてみたい気もしますが、よその人に教えてもらうものでもないような気がします。やはり、スタッフの方の言葉を聞き、利用者さんのことを知り、自分で考えたいと今はまだ思います。

スタッフの方の言葉を聞けたこと、本当によかったです。ありがとうございます。



#7 「表現未満、」を話す、聞く

## スタッフの感想

column

トークのホストを務めたレッツのスタッフ17人の感想を掲載する。



## 石山律

終わったあと、2日寝込んだ。イベントなのか、今の年齢のホルモンバランスなのか、寒暖差なのかわからないけれど、寝込んだ。ゲストとの振り返りの時に、今回の会が「ケアする人のケアになっていた」という話もあったんだけど、わたしにとってはそんなことはなく、なんだか自家中毒のようになっていたんじゃないかと思う。レッツスタッフとして、と枕をつけたとたんに、何を話そうかどう顔をしてここにいればいいのか全然わからなくなってしまった。お前にはここで何ができるのか、他の誰とも違う、やりたいこと、譲れないもの、大事にしていること、そういうことがないところにはいけないんじゃないだろうかとか、どうしてこんなことになってしまったのかわからないけれど、そんなことばかりがぐるぐるして苦しい時間だった。終わってみると、わたしは誰かの話を聞くことで自分が照らされる、そしてようやく話し始められるのだったなあということ思い出した。10年以上ぶりに再会した大学の友人がブースに来てくれて、わたしたちいつから会ってないんだっけ？そもそもどこでどうやって出会ったんだっけ？と話してみてもいつまで経ってもお互い思い出せなかった。一緒にお茶を飲んでテーブルを囲むだけでも和らぐことがあって、本来はそういう時間が好きなのだ。いつでもまたやりましょう。

.....

## 見山陸生

私自身は自分のブースに誰も来なくていいと思っていた。それは話したくないからではなく、新人(10ヶ月)の話を聞きに来る人がこのイベントにいるのだろうかという理由だった。そして来る人がおそらく私の知らない全くの他人であることにいささか恐怖を覚え、そもそもコミュニケーションを取れるのだろうかという思いからブースの参加者の数を3人までにさせていただいた。さらに言語コミュニケーションをスマホの音声認識に頼っている私は周囲があまりにうるさいだろうことを考え筆談をしようとしていた。できる限りの予防線を張り掲げたテーマは「新人と話す。紙とペンで。」「文化とはなんですか?」「あなたにとっての非言語コミュニケーションを教えてください」である。聴覚障害を持つ私にはコミュニケーションは重要なテーマであると言うことは簡単だが同時に重要でないと割り切ることもできる。おそらく参加者の側も緊張しながら、シェアハウスの狭い

個室で結局筆談せずに声で(スマホで)話し合った。文化という身近だが実感の湧かない言葉を巡りながら言語的、あるいは非言語的に?コミュニケーションをするとはどういうことだろうかということ話し合ったことは、自分が日々ここで何を感じているかということをつかめないままでも整理して深められる試みであったと思う。またブースに参加された方々は10代から少しお年の方まで、向き合って話していただける方が多くとても温かかった。

.....

## 内田翔太郎

今回、私は「エンパワメントとこだわり」というテーマで話をした。話の内容は障害者のこだわりを「好きなこと」として捉えるとどんなこだわりも魅力的に見え、好きなことは生きる力の原動力になる、という私の視点から見た「表現未満、」の語り直しのようなものだった。

私は障害者のエンパワメントについて話をしたつもりだったが、イベント終了後に振り返ってみると、逆に自分の方がエンパワメントされていることに気がついた。話をする前、どこかで私は自分の関心事は極めて個人的なもので、他者に関心を持ってもらうことはないのではと思っていた。しかし実際に話をする、意外なほど参加者の方々に興味を持ってもらい、思いもよらない方向に話が展開した。また、私の個人的な関心に対して興味を持つ人はどういった人なのだろう、と私自身もイベントの参加者に対して強い興味を持った。

このイベントを通して、自分を開いていくことの可能性を強く感じた。考えは閉じたままでは先に進まないが、他者を開いて共有することで一段と深まりさらに変化する可能性に触れることができた。私が今感じている可能性を、参加者の皆さんも感じていたらとても嬉しく思う。

.....

## 塚本千花

何かを伝えようとするとき、総括をしてしまう(統括になってしまう)ことにいつも疑問があった。今回の企画で、「伝える」方法についてのひとつのあり方が発見できたと思っている。ゲストトークを除いて、ほとん

どの時間は同時多発的に物事が進行した。スタッフを含めた参加者たちは、空間を共有しながら、全員が違う時間を過ごしただろう。普段取りこぼされているもの（スタッフ個々の実感や思考）、その場で自分が取りこぼしたもの（聞けなかった他のトークセッション）に接近することで、総括よりはもっと輪郭の曖昧な、けれど深さのある“レッツというよく分からないもの”のかたちが浮かび上がったのではないだろうか。ただ、わたしは自分から自分の話をするのが苦手なので、今回の仕組みはともありがたいがたかたかけれど、ひたすら聞き手になり続ける（ひとによっては対話するブースもあったと思うが）来場者のみなさんはたいへんだっただろう。そんなことになるだろうと予期できていたか否かはさておき、しかし当日は、レッツのことをよく知らないし来たこともない、というひとの参加が多かったことに驚いた。どうしてだろう。わたしは「伝えること」や「孤独について」というテーマを話に含んだ。ひとに伝えたいものを持っていることは、同時に伝わらなさを抱えることで、だから孤独なのかもしれない。でも、伝えることと、理解を得ることは別じゃないかと、参加者のひとりが言ってくれた。人の数だけ解釈がある。伝えたあとのことは、相手に委ねれば良いのだと思った。わたしたちは、それぞれの場所で、それぞれ出会ったひとたちに、それぞれ話したいことを話した（あるいは、話さなかった）。それは、そういう話を「聞きたい」「知りたい」「なんかよくわからないけど面白そう」と感じているひとが世の中にいたから成立したのだ。組織とか、福祉とか、アートとか、そういうものを掲げなくても、ひとは、個人の口から語られるものに興味を持つものなのだと思う。だとしたら思ったよりひとは孤独ではないのかもしれない。やっぱり孤独かもしれない。統括できないままこの文章を終える。

.....



### 曾布川祐

空間というものは、目を開けたときに初めからそこにあるものではなく、ましてや建築によって作られるようなものでもなく、人が「自分と同じ感覚能力を持つ」と信じられる別の人との関わりによって、内的に構成されるものだろう。その意味で、今回の企画はとても面白かった。いつも勤務日の大半をその中で過ごすたけし文化センターの空間が、まったく変わっているように感じられたからだ。いつもトイレに向かうための通路が参加者の方の背中で、事務所に筆記用具を取りに行くための隙間がトーク中

のスタッフの尻で、塞がれていた。いつもなら容易に行き来できるはずの空間が、そこにはなかった。しかし、そのことが、わたしにいつもと異なった「奥行き」を感覚させてくれたのだ。

参加者やスタッフの間からは、「もっとたくさんの（あるいは全員の）スタッフの話が聞きたかった」という声が多くあったらしい。それもまた「奥行き」の感覚に通じている。各スタッフのトークブースは、あたかもそれぞれが底の見えない黒い穴のように感じられた。「何を話しているんだろう？」気になるけど分からない。それが、空間と繋がって、たけし文化センターはどこまでも続いている魅惑的な洞窟のように思われたのだ。

### <追記>

改めて、イベントタイトルをこうして上に（初めて）自分の手で書くと、自分が企画会議の際に感じた抵抗感・違和感は、単位の問題だったことが分かる。要するに、職員名簿を作るときや、給与計算をするとき、行政上の書類を作るときなどに便宜上用いられる「正規スタッフ数」という形式が——それによって初めて「人」という単位を用いて「数えること」を可能にする形式が——「トーク/語る」という個人的な能動性を要求するイベントで用いられてしまっていること。否応なく等質化されて、括られて、その中で並列させられたうえで、尚まだ自ら語ることを要求されること、そのことが問題だったのだ。

.....



### 杉田可縫

わたしの選んだテーマは、最近わたしがよく考えることで、なおかつひとに聞いてみたいことたちでした。ひとつめの『『子どもの居場所』ってどうつくる?』は、いま担当している事業のちまた公民館をやっていくなかで考えていることのひとつです。子どもの居場所作りをしているところが増えていますが、情報交換の場やつながりが大事だと感じています。この日もいい出会いがあったら…という期待もありました。そしてなんと!この日、こども食堂に興味があるという大学生と、いまこども食堂をしているという方がいて、じっくり話していかれました。しめしめ、とても嬉しい出来事でした。ふたつめは「レッツっぽさ」。行く先々で「レッツさん、いつも面白いことしてますよね!」などと言われては、プレッシャーやモヤモヤを感じています。レッツにずっと馴染めません。…レッツってなんですか?今

回のトークで答えは出ませんでした。レッツの作る空間や考えを体感したくてここに入ったんだなとハッと入社当時の気持ちが蘇ってきました。みつつめの「仕事、はたらく?→何で?何のために?何をしたい?ぜったい?いつまで?」は特に最近よく考えることでした。ときには働かないという選択肢もあるということを知ったり、ひとと関わる仕事をする上でドライに切り分けた方がいい部分とドライなだけではいけない場面もあるのかなと思ったり、仕事とプライベートの切り分けはどこまで?今回のイベントも仕事の 일환ですが、そこでいい出会いをつくるってなんか矛盾してる、けど楽しい、けど変な感じがする。そんなことを考えながら、出会いが生まれ、初心にかえり、人と話すことの大事さと大変さを実感した一日でした。

.....



### 渡邊亮介

『アウトサイダーからの脱却』『夢と可能性』『テーマと乖離する現実』私がこのイベントで話したいとあげた3つのテーマは、すべて今の自分の揺らぎを表していた。なんとなくそれっぽい言葉に包んで『語りのテーマ』らしくしてはみたものの、実際は、ただの私的な悩みを、机の上にドンッと置いただけだ。ということで、私のテーブルに加わった計9名のお客さんは、ほとんど一方的に私の愚痴や悩みを聞くような形になった。

そんな状態でもこのイベントに安心感があるのは、色んなスタッフの話が聞けるからだ。私のような粗暴で怠慢な話をする人もいれば、何かに真剣に向き合った話をする人もいる。これは、普段の支援の構図にも似ている。対応が極端にならないし、対応する側も自分のやり方を重く鑑みなくていい。そんな言い訳をしながら、イベントは進んだ。

今回のイベントは、お客さん側もまた多種多様で、学生さんや他業種の方、レッツを知らない方がいつもより多い印象だった。ある学生さんは「自分の知らない分野の難しそうなお話イベントには来づらい。このイベントは、話題のジャンルもバラバラで楽しそうだった。自分も入れそうだと思って来た。」と言っていた。多種多様であることは、多種多様な人たちを受け入れられるということだ、と改めて思う。

.....



### 高木路子

「アーダ・コーダ・ソーダはどうだった?(尾張さんのタイトルいい!拝借。)」

「考え続けることは寄る辺がない。辛い。誰か答えをくれ、と思う。」とわたしは言った。わたしはこのイベントが決まった時「自分の関心やモヤモヤを皆に話せるんだ!」と「レッツのスタッフの全員違う考えが世に出るんだ!」という2つの喜びでワクワクしていた。しかし、アート、福祉、社会問題やレッツのこと etc...。皆と話したいこと、言いたいことがたくさんありすぎて、テーマを出すのが本当に難航した。そしていざ当日になりスタートしても「何話そう…」となり話し出すまでモジャモジャしていた。一方、場の仕度をわたしのスナック企画「スナックありじごく」にしたため、私はギラギラしたパブリーな衣装に身を包み、酒を片手に、「あぁ〜〜あ〜〜」とか言っていた。初めてのお客さんにも「テーマもお話も、迷いながらも誠実に進んでいくのが面白かった。」と言われた。後から振り返ると、最初のはしゃぎようも含め良くも悪くも己のあり方を体現していたと思う。

蛇行しながら結局話したのは古典落語のようにになっている自らのレッツでの葛藤の話と、その言葉だった。障害者はこうだ、支援はこうすればいい。そこに確固とした答えはない。あったとしてもそれは、皆で話し合いモヤモヤしたりしなかったりして生み出したその時その時の最適解だ。それは日々更新されていくし、そうあるべきだと思う。今回もあーだこーだ言い合ってた更新された。

社会がそうであるように、レッツも一つの社会で、アートや福祉、またはレッツのことを語る時にも様々な考えと切り口がある。その数の多さに戸惑いを今でも感じているが、それを生々しくそのままに、しかしお互いや強大なものや折り合いをつけてやっていくんだということがイベントとして一つの形に打ち出されたのは大きなことだと思うし、個人的には苦行が続いていくめまいのようなものもある。考え更新しつつ筋トレを続けていこうと思う。

レッツとは、常に考えることをあきらめないことと見つけたり。

.....



### 久保田瑛

「久保田家のいないアーダ・コーダ・ソーダ! どうだ?

— ダメだ! 起き上がれない。」

なんとイベントの数日前に腰椎椎間板ヘルニアを発症!当日は激痛で動けなくて、ただ、寝室の天井を仰ぎながら、ベッドの上からオンラインで繋いでもらうという(PC上で寝転ぶ姿は涅槃像みたいと言われた)なんと滑稽な姿で参加。しかしだからこそ感じたものがある。今回のイベントの趣旨は「象徴としてのたけしさんや、親であり代表の翠さんの物語」で語られることが多いレッツの活動を、スタッフ17人の言葉と身体を持って多角的に語り、そこから現れる「共有知」的なものを掴めたい、そんな企画だったと思う。言い換えれば「久保田家の物語」から「レッツの物語」をスタッフの手によって語り直すイベントだった。そう考えると、「久保田翠の娘であり、たけしの姉」である私が、当日その空間にいらなかったのは、ある種の必然だったのかも知れない。

わたしのトークテーマは「生存戦略から考える福祉とまちづくりと銭湯計画」「たけしから結婚祝いをもりたい」。3階の私の会場に設置されたオンライン用PCの横には、小上がりでまどろむたけしの姿があった。ヘルパーさんと一緒にほぼ大半の時間をそこで過ごしていたらいい。参加者の皆さんはZOOM越しの私と、隣で寝転ぶ生身のたけし、双方を目撃する形で、トークが始まる。

まさに今、痛みでまもらられない身体で不安いっぱいな状況を話し、そして私だけではなく、病气や介護や育児、生きづらさを抱える人たちも、一方でビジネス第一線でバリバリ働く人たちも、皆が、福祉をベースにこの街なら生きていける、面白いことが起こる、そんな環境づくりと銭湯計画の話をしてみた。

そして、なぜそんな場所をつくり、まちづくりにまで広げたいのか。このイベント前に散々トークテーマについて頭を回していた時に、ふと、「自分が何かを受け取ってしまったからだ」と腑に落ちた瞬間があった。なぜか、この「受け取った」という感覚がしっくりきてしまったのだ。父が亡くなり、わたしとたけしは、何かを受け取ってしまったのだ。ああ、これは贈与のはなしだ。

贈り物をされたら、受け取った側はそれを自覚し、贈り物をわたす…そうして共同体に連帯ができていく、それが贈与の基本だ。しかし、重度の知的障害がある、たけしの場合はどうだろうか?一般的には重度の知的障害がある方は意志が分からないことも多いため、贈り物の循環からは逸脱した存在だと思われる。

でも、わたしはそうは思わないのだ。わたしは、たけしに「受け取ってしまった」感覚があると思っている、というか思わざるをえない。現に父が亡くなってから、彼は別人になった。1人の個人として、50人近い関

係者にサポートしてもらいながら、自立生活を始め、障害がある方の新しい生き方を開拓している。私も昔は、彼にプレゼントをあげることがあっても、もらうことは考えもしなかった。しかし、今の彼には、「結婚祝い」という象徴的な贈与をもらいたいのだ。例えそれがお金でなくとも。経済社会に生きる個人として、そして社会的な個人として、たけしは、贈り物の差出人になれるのではないか。いや、すでに彼は贈り物をしているのかもしれない。そんな話をした。ややこしい話なのは承知だったが、どうしても話したかった。参加者の皆さんには、「久保田家の物語」を肌で感じてもらったようにも思う。そう、3階の私のブースだけは、今回のイベントで異質だった。奇しくも、わたしとたけし、家族が現れていた。

そして会全体は断片的にしか参加することができなかったが、振り返りで青木彬さんがおっしゃった「このイベントはケアする人のケアなのではないか」という言葉がとても印象的だった。私は2000年の頃からレッツに関わっているが、確かにここ5~6年はスタッフが増え、お互いじっくり話す機会や外部のゲストと1対1で対話する、なんてイベントは少なくなっていたように思う。その中で、自分たちの語りを取り戻すことは、スタッフ自身へのケアなのではないか。対話を繰り返す中で「共有知」(そんなものあるかどうか分からないが)をスタッフ各々が自覚するのではないか、そんなことを感じた。そしてこの形態はレッツだけに限らず、他の福祉施設や臨床の現場でも使えるかも、そんな邪なことも思い浮かべながら、まもられない身体を横たえて、画面越しに「レッツ」をみていた。

.....



### ササキユイイチ

「わるいゆめをみたー「アーダ・コーダ・ソーダ!どうだ?」に寄せて」

これは当日も話したことだが、前日の夜に悪い夢を見た。聴衆の前で私は一時間ほど話すことを期待されていて、実際にその場に立っている。だが、話すべきことが分からない。手元でスライドを探してみても、テンプレートの文字列が入ったまっさらなデータだけがある。私は誰になにをなぜ話そうとしているのだろう。

当日の朝、見慣れた場所を来場者に向けて設えるとき、夢の続きのような見慣れなさを感じた。ともにはたらくこのひとたちは誰だったんだっけ?

からだひとつで臨んだテーブルで私たちが話したのは、私的なものと公

的なものの混ざり合いについて。制度の中に位置づけられた役割を持って出会い、いつしかのっぴきらない関係になること。言ってしまうことでタガが外れてしまいそうな恐れがあること。あるいはそれを言うことは傲慢だと分かっているが、でもどうしてもないことにできないこと。私たちをつなげながら遠ざけているこのテーブルみたいなこと。

当日を終えて今日までのあいだに、同じテーブルを囲んだ何人かの方から感想をいただいたり、やりとりをした。とてもありがたく思う。同時に、正直なところ、キツネにつままれたような感覚が今もある。見慣れたものが見慣れないものになる、世界の不気味な手触りとともに、もう少し会話を続けたいと思っている。

.....



### 竹内聡

#### 「語る会に参加してどう思うか？」

お客様を入れた状態であれば、外に出せる話をする。内側でのプレスト形式であれば別ですが、自分の頭の中にあるモヤモヤをそのまま話すことは外に出せる話ではないのでは、と考える自分を発見しました。

それは、自分の感じた事考えた事をレッツの枠組みの中で形に出来るように変換したり、ある種の飛躍を加えたりして企画にまとめる等するのが仕事と考えているということの裏返しであり、それはそれでひとつ仕事の仕方としてあると思うのですが、一方でそういった「自分の頭の中にあるモヤモヤをそのまま話す」やりかたも自分にとっての仕事の仕方としてありえるのだろうか?とさっそく考えてみているところです。

.....



### 櫻井喜維智

外部のお客さんが来て自分の持ち場があり話すのは今回の「あーだこーだ」が初めてではないだろうか?

自分自身は起承転結での会話や文章の作成はとても苦手だから、どんな話し方になるかは想像がついていた。

最初の持ち時間のテーマ「生きるための食と好きな食について」話したときは、事前に「話すことが苦手、聞いている側がよくわからず終わるかも」

と伝えていた。このテーマの参加者は作業療法士や薬剤師など専門職の方が多かった。自分の食事で考えていること、支援する上で自分が考えている事、モヤモヤ、でもある程度自己解決できている部分を言葉にしていくと自分としては気にしていないワードを拾ってくれて話が広がったり、無言になったり。

2回目のテーマは「こだわること」について。このテーマも自分のこだわりと支援で感じる利用者さんが持つこだわりを交えて話した。参加者がまるっと変わっているのが当たり前だが最初のテーマの時より参加者さんが持つこだわりや、ご家族が持つこだわりで思うことなど自分が話さずとも会話が進んでいった。改めて、自己解決していることでも話してみる必要性、支援の現場から離れていても自身の生活と支援、利用者の生活と支援を紐付けて話をするのが一番進めやすいということがわかった。

.....



### 高林洋臣

「大変そうな仕事ですね。」障害福祉施設で働いていると伝えたときによく返ってくる反応だ。相手は「立派な仕事だ」という褒めの意味合いで言うてくれるのは分かるのだが、どうしてもそこには「私はやりたくない、関わりたくないけど」という思いが透けて感じられてしまう。それに対して「そんなことないですよ～楽しいですよ～」と取り繕うが、大変そうだと思われない説明の仕方はなかったのかと毎回反省する。

今回私は、アルス・ノヴァに通うある利用者との関わりについて話をした。ここで働くことの面白さを伝えたいという意図だったが、あえて面白いポイントを明確にプレゼンしなかったのが、大変な現場の悩み相談として受け取られたと思う。それでも今回の、スタッフの興味関心を中心に対話をするという枠組みのおかげで、30分という時間は短かったが、「大変そうな仕事ですね」と他人事で終わりではなく、話を聞いてくれた人がそれぞれに何か受け取ってくれたかなと感じている。それは参加者みなさんの明確な応答はもちろん、言葉にならない反応からも受け取ったものなので、少人数の対面で行ったからこその手応えだったのではないかと思っている。

.....

## 佐藤啓太

語ることを経験して自分としては何を思ったか？自身の家族について話をしながら、レッツの「たけしと生活研究会」からさかのぼり2000年にお母さんの集いとして始まったこの法人の歴史とがシンクロしたりしなかったり、でも自身の生活を開示し如何に他者と共に家族の問題を考えていくのがこの法人の大切な軸としてあると感じてきたし、そのことについては今回のイベントで、あのテーブルで、私と来訪された皆さんと共に語らう時間を通したことで、私自身の生活について考察を深める機会となったと感じている。貴重な時間をありがとうございました。そして、私自身への問いも目覚めた。サービスを提供する者でありながら、自身の生活の困窮を他者やサービスを活用することで生活そのものが楽になることを知りながら、たじろいでしまう私と家族の姿を思い返した。「たじろぐ理由はなんなのか？」そんなことを語らいながら再確認する場であった。抱える問題や疑問、雑多な感覚を語らう場やテーブルに上げること、それは自身を開示すること。開示した後「あちゃあ、ちょっと開きすぎたかな…」とダメージを受けてしまったのは否めないが、この行いこそ自ら設けた壁について考えるキッカケとなったのでは、と感じた。

.....

## 水越雅人

「アーダ・コーダ・ソーダ！どうだ？」（以下、「アーダ・コーダ」）は、17人のスタッフが語る、もしくは、参加者の方とともに語り合うイベントとして開催された。

いつもであれば法人代表の久保田が、イベントごとのテーマに沿ってレッツの活動紹介や活動の根幹、問題提起、これからの社会のあり方などを各所で話している。

対して、「アーダ・コーダ」は、それぞれのスタッフが現場での経験、気づき、もやもや、悩みといった個々がふだん考えていること、感じていることを語った。特徴的なのは、それぞれの日常生活や社会などつなげて語るスタッフが多かったことだ。

私は「表現と居場所と現場」をテーマに自分自身のことを語ったのだが、参加者の方々は一方的に聞かばかりでなく「その感じわかる」「私の場合……」といった反応やツッコミがあり、自然と語り合う場が生まれて

いった。参加者4、5名に語り手1名という小グループであったこと、語りには隙間や余白があるからではないかと思った。

そんな「ささいなこと、生活のこと、身の回りのこと」を語り合える場がそこから立ち現れる「まち・社会・生活の姿」があるのではないか。そして、障害福祉の日常の現場があるわたしたちが、現場の延長としてつくった語り合える場を体感する機会となった。

.....

## 尾張美途

「あーだこーだそーだはどうだった？」

ちょうど『父帰る』面白い!と思っていたところだったので、テーマはほとんど迷わず決めた。読んでない人も参加できるように内容をまとめてみたら、支援計画に使うアセスメントシートの様になった。小説や戯曲をもとに支援会議出来るね、ミステリーは困ってる人だらけだしな!

思い返してみれば今回のトークは「しえんかいぎ」のようだった。家族の問題から父の問題に主題が移り、父の気持ち、歳をとると故郷へ帰りたくなる人の気持ち。帰りたかったのは家族の元ではなく、故郷だったのでは？家族以外に寄りかかれば家族の元には帰って来なかったのでは？家族以外の居場所って？家族って何？

参加してくれた人の意見を聞いていくうちに、私の中の「父帰る」は家族という概念に縛られがちな私たちの問題になっていった。社会的課題、職員が実際に悩んでいることがトークのテーマに上がるものの、助成金に繋がる道筋が見えないというのは、昔からある課題。何故？今回の「アーダコーダ……」の企画というのは、真っ白なキャンバスに、今ある絵の具を出してみたら、どんな色になるのかな？というような実験であったと思っていますが、どうだったんだろう。私は全体を俯瞰で見れないけれど、自分自身の指向は確認することが出来た気がする。

いつもより自分が多めに話すつもりでいたけど、気づけばお客さんの意見に深く傾き、自分の記憶を辿りながら、思いを巡らせ考えていた。沢山聞いて、沢山考えていた。ハッ、そう、「かたりのヴェ」である。多分、私はこういう事が好きなんだと思う。

.....



## ゲストトーク

### <ゲスト>※50音順（敬称略）

青木彬（インディペンデント・キュレーター、一般社団法人藝とディレクター）  
アサダワタル（アーティスト、文筆家、近畿大学文芸学部文化デザイン学科専任講師）  
津口在五（輛の津ミュージアム キュレーター / 生活支援員）  
辻琢磨（合同会社辻琢磨建築企画事務所 代表 / 403architecture [dajiba] 共同主宰）  
中田一会（マガジンハウス〈こここ〉編集長、きてん企画室 代表）

### 高林（レッツスタッフ）

皆さん長丁場お疲れ様でした。今回、参加された皆さんは各ブースに散り散りに話を聞いてもらい、他のブースがどんな感じだったのかが分からないと思うので、このゲストトークではゲストに、参加したブースの話の内容や感想を語っていただこうかなと思います。

まず今回、このような形でイベントをやった意図なんですけど、こうやって前に出て代表する人だけが喋って、それを受け取って、来訪された皆さんはそれぞれが話しができずに帰っていくっていうことに疑問があって。今までトークイベントをやって様々な人が集まってくれて、いろいろ話を聞きたいなという思いが有りながらも聞くことができなかった。そこで今回こういう形で少人数で集まって話すという形をとりました。

もう一つは「レッツの活動を紹介します」となったときに、いろいろな分野で様々な活動をやっていますが、スタッフ一

人一人は考えてることが違って「本当はこういうふうにやりたいんだ」みたいなものがあるって、そこに大事な部分があったりします。日々の福祉サービスの支援だったり、文化事業や、外向けのイベントもスタッフ一人一人が考えていることが現れていたりもします。その辺りを全員分は無理ですが、少しずつ皆さんに聞いてもらえたらいいなと思って今回のイベントを企画しました。

スタッフの人数も多くなってきて常勤職員で17人います。そして今後レッツを組織としてどうしていこうかと考える機会があるのですが、内部で打ち合わせをしてもなかなか話がドライブしていかない課題がありました。そもそも自分の思ってることを出す機会が無かったので、それをまずは外の人と話をしながらスタッフそれぞれが考える場にもなればいいのかと思いました。

やってみて、取っ散らかった悩み相談みたいな話をするスタッフもいれば、淡々と

活動紹介をするスタッフもいれば、福祉のことであれば文化事業とかイベントのこともあればといった感じだったと思いますが、ゲストの皆さんにどんな話を聞いたのかと、そこに対する感想などを1人ずつ話してもらいます。まずは青木さんお願いします。

### 青木彬

よろしくお願いします。キュレーターをしている青木彬と申します。今は神奈川県に住んでいて、主に東京や関東圏で仕事をしています。現代アートの展覧会やプロジェクトの企画運営等をしていて、ここ数年、福祉分野の方と協働することが多く、それをきっかけに自分もどんどん福祉のことに興味が湧いて、今は、社会福祉士の資格を取るために、通信で大学に通いながら仕事をしてるんですけど、その過程でレッツと出会って、リサーチやトーク等に呼んでいただいております。

最初の尾張さんのグループでは家族の話がテーマになってんですけど、参加者の皆さんが自分の家族の話を始めたりして、家族と福祉みたいなことをテーマにディスカッションをされていました。二つ目の内田さんのグループでは、ズルさについて。支援現場を通じて出会ったズルさという言葉、キーワードが気になってというお話がありました。レッツに通われる利用者の方たちは、その辺に寝転がったりして、ありのままの自分でいられてなんかズルいんじゃないかっていうことを、正直に話してくれた学生がいて、なんかその気持ちも分かるけど、じゃあ、そのズルさって何なんだろうっていう関心をみんなで掘り下げていきました。三つ目の水越さんのグループ

では、最近気になることや、大学受験から今に至る関心事などをいろいろ伺いながらみんなでフンフンと話をひたすら聞いていました。

全体の感想的なことというのと、会場の壁に貼られてるキーワードがテンションというか書きぶりとかが全然違って、なんかそれがまず面白いなと思って。参加してみてもスタッフの皆さんやり方が違って、自分の関心をひたすら話してくれる人もいれば、参加者とのディスカッションを積極的にするグループがあったり本当に様々だになっていうのを楽しませていただきました。

先程スタッフそれぞれが話す機会が今まであまりなくて、とおっしゃってたんですけど、今回のキーワードを出すときに、スタッフ同士でシェアし合ったりはしなかったと聞いたんですが、その割に結構キーワードは参加した3グループ繋がっているものが見えたりはしたんですね。それこそ内田さんの会で出たズルさみたいな言葉が水越さんから出てきたりとか。なんかそういう共通する感覚とかは、違ったキーワードの中にもあったんじゃないかなっていうのを感じました。

### 高林

青木さんは昨年度リサーチで、代表の久保田にインタビューしてもらいましたが、そのときと今回の印象の違いはありますか？

### 青木

そうですね、久保田さんにインタビューをさせてもらった時は、理念というか、少し大きな話が多かったかなと思うんですけ

ど、今回、スタッフ一人ひとりの話を聞く中で、普段の支援現場で直面した本当に小さいエピソードだったり、そこから考えたことが聞けたのは、ちょっと違った角度から、またレッツのコンセプトが見えたかになっていう気はしました。

## 高林

ありがとうございました。では、次にアサダさんお願いします。

## アサダワタル

初めまして、アサダワタルといいます。今日は家族と大阪から参りました。僕は普段、音楽を軸にコミュニティ、例えばレッツも何度も来させていただいでいて、福祉施設と言っているのか分かんないですけども、そういう場所とか、あるときは復興公営住宅とか小学校とか商店とかいろんな所で、そこにいる方々とアート活動をするという仕事をアーティストとして作ってきました。いろんな現場に行ったりお話を聞いていろいろなことを感じるの、ある時はそれを本に書いたり研究したりとか。そういった活動の延長で2022年より近畿大学文芸学部で教員をやっています。

僕は杉田さんと曾布川さんと塚本さんという3人のスタッフのテーブルでした。僕はほとんどお話ししたことのないスタッフの方々のグループに入れてくださいって高林さんをお願いしていました。

最初の杉田さんの所は、広く居場所の話だなと思って聞いてました。杉田さんが出したテーマは、一つは「子どもの居場所」で、ちまた公民館でやってる実践の話。子どもの居場所みたいところで、実際、お

子さんがちまた公民館に通っているという親御さんも参加されてました。あと「働くって何？」というテーマ。杉田さんはここで仕事として働いてらっしゃるけど、何ていうのかな、お金も稼がないといけないし、でも一方でこの場所はある人にとっては生活現場でもあるので、そこに仕事として関わる感覚みたいなものが、いろいろ混じってくる。地続きになってくるみたいな話。それと同時に、そこから展開して「結局レッツっぼさって何？」っていう話が出てきました。それぞれ10年以上レッツに関わってる方々もその回には多かったので参加されてる方それぞれのレッツとの関わりについて話しました。

曾布川さんの話は哲学をベースにした話でかなり抽象度は高かったんですけど、価値の無いコミュニケーションっていうことについて話されていました。自閉症ってAutismって英語で言ったりしますが、そのことが自己っていうauto。自己とか自主的。なんか自動で動くみたいなことの語源的な解説もあって、ちゃんとレジュメも準備されてて凄い読み応えのあるレジュメで、まず最初にみんな黙読するところから始まって。その文章が凄い面白くて凄い難しいんですけど、要は一つ一つ人が何かを価値判断をする、意味を見いだすときに知性っていうものをベースに人と繋がっていくとか関わり合って生きていくのが社会のスタンダードだとしたら、その自閉症って日本語ではAutismと訳されているけど、もっと語源的なことを考えた時に、そのときそのときに止まって断片的に知性で捉えるんじゃないくて、それが流動体のように思考がずっと動いていながら、一個一個の判

断もその場その場で瞬時に行われていくような在り方についての話だったんです。だから意味を見いだすというのパンパンパンと判断して、最速で何かを決めていきながら生きていくっていう、その在り方みたいな事をここの現場の利用者さんとの関わり合いで見いだしたっていう話だったんですよね。それは凄く面白いし永遠にその話ができそうだなっていう感じがありました。あとそこに参加されていた18歳ぐらいの若い方々がお二人おられて、哲学の本をよく読んでる感じだったので話がどんどん盛り上がっていく曾布川ワールドに参加させていただきました。

そして最後の塚本さんはコミュニケーションの話で、結局折り合わない・考え方が違う人たち同士がどうやって共存できるかっていうことと、できない故の、言ってしまう「別れの話」だったというふうに思いました。別れていくっていうこと。それを後から反省したりもするけど、どう捉え直していけるかっていうことと、今レッツで働いていることと、だからといってレッツがユートピアではないっていうこと。非常に面白かったですし、この後どうなるのかなっていう感じで、今ここに座ってます。よろしくをお願いします。

## 高林

アサダさんにはコロナ禍前は、定点観測的に毎年ゲストとしてお越しいただいてました。今回は3年ぶりぐらいに来てもらいましたがいかがでしたか？

## アサダ

こういう方々が今働いてらっしゃるんだ

なっていう感じなんですけど、思い出したことがあって。実は2010年頃、入野のアルス・ノヴァが立ち上がって1年程経ったぐらいに、鈴木一郎太郎君という当時ここで働いていた友人に呼んでもらって、今いる水越さん、佐藤さん、尾張さんとか一人一人に「目的のないヒアリング」をしました。佐鳴湖をデートしたりとか、ファミレスに行ったりとかそれぞれと2人きりになって。施設の外に出て行って、ただりとめのない話をするっていうのをしました。で、向こうも多分困ってるんですよ。「何の話したらいいのこの人に？」って多分思っていて。なんか2人きりで喋るっていう。それをやったことをすごい今思い出しました。あれが一体、僕にとっても、皆さんにとってもなんだったのか。一世代前だから、それから12年ぐらい経ってるんですよ、今。だからスタッフの方が誰かに向けて語るっていうのは、さっき青木さんもおっしゃってた理念でも事例でもない何かっていう感じがあると思いましたね。

## 高林

ありがとうございました。次に津口さんお願いします。

## 津口在五

こんにちは。広島県福山市から来ました。鞆の津ミュージアムという所で働いています。障害者支援施設を運営している社会福祉法人がやっているギャラリーで、いわゆる「アウトサイダー・アート」とか「オール・ブリュット」などといわれる創作物を展示する空間なのですが、「アウトサイダー」という言葉自体が様々な問題を含ん

でいるため、今は「プロの作り手じゃない人の生にねざした独学・自己流の創作的表現を取材 / 記録 / 展示する場所」というような伝え方をしています。出展者の中には障害のある人もない人もいるというような形で、文字通りいろんな方々の表現を取り扱うことができ、と思いつながらやってきました。元々は、当館母体の成人利用者さんのための入所施設の生活支援員として3年間ぐらい現場で働いており、その前は放課後等デイサービスに2年ぐらいいたので、支援現場での直接的な支援経験は5年間ぐらいという感じです。あとはミュージアムの中でも支援活動をやっているということもあり、そういう立場で今回は呼んでいただいたのかなと。

今回、僕は竹内さんと高林さんと久保田瑛さんの話を聞いたんですけど、三者三様でした。竹内さんは文化事業の話で、高林さんはある利用者さんの支援をしている自分の話ということで、ケースのケースみたいなメタの話になっていたかなと思います。最後の久保田瑛さんは、レッツ全体の話やこれからのこと。レッツのシェアハウスで新生活を始めた弟の久保田壮さんの話を起点として、プライベートとパブリックとか、受け取ると与えるとか、そういう話だったと思います。

個別に話すと、竹内さんは「クラブアルス」という障害のある人もない人もいろんな人が同じ空間に集まるためのメディアとしてクラブイベントをやっているということで、もともとフェスへ行った時に全然知らない人たちが集まって楽しい時間を過ごせた、という実体験がモデルになっているという話でした。今、レッツは「福祉を地

域に開く」ということからさらに展開して街づくりの方に踏み出そうとしているのですが、そうしたことを念頭に、例えば祭りとか山車を作るとか盆踊りをするとかっていう形で地域を巻き込みながら外に開いていきたい、というような話をされてきたかと思います。

高林さんは、担当利用者さんとの個別の関係について具体的な話をされていて、「支配的になりたくない」ということで、その悩みを聞くという感じでした。その利用者さんは、不安になった時に買い物をしたくなったり、人のものを欲しくなったりするそうなのですが、そのような時どうしたらいいか、といったような。なかなか答えが出づら問題で、すごく難しいわけですよね。個人的に思ったのは、レッツが日本の中で一般にどういう立場で見られているかわからないですが、文化事業をすごくやっている場所として見ている人にとって高林さんのお話は、普通の意味での生活支援が行われる際の悩みなわけですので、そのこと自体が意外に思われるだろうなということ。「レッツの裏側」というか、レッツのパブリックイメージとは異なるような話ですが、そうした現実があるからこそその文化事業ですので、そうした「裏」はもっと知られるべきことだと思います。そのとき、一緒に参加されてた方からも「ケアの中でどうやって自由を確保していくのが難しいから、そこの部分が最も大事な問題だよ」という話が出たことが印象的のこりました。

最後の久保田瑛さんは、自分（瑛さん）をはじめ、誰であれ人が生存していくことを可能にするものとしての福祉施設の可能

性、みたいなことをお話しされていました。福祉施設って生活に必要なものをフルスペックで何でも作るから、もしかしたら、そういうものを地域に開いていけないか。もう一つは、弟の久保田壮さんから「何かを贈与してもらいたい」という話をしていました。壮さんは今、支援者 / ヘルパーがトータルで30人くらい関わっているのだそうです。すごく沢山のの方にケアしてもらうことによって日常生活が成り立っているということは、自分の意思 / 決定権と生存自体が自分の外にある何かに大きくゆだねられている、ということ。でも、壮さんはそんなふうを受け取るだけの存在じゃなくて何かを贈与できるはずの存在であり、何かの通過儀礼を通して社会の一員として在るべきなんだけど、そうじゃないものとして勝手に自分が考えていたのは不思議なものだなと、瑛さんは言われていました。壮さんはずっと長いこと子どもの頃から、未来でありうべき福祉の実現にむけ、自分の顔や体を世の中に差し出すことによって、壮さんの後に続く同じような人たちの生存モデルを与えてるんじゃないか、というような話をされていたかなと思います。そのように、1人の人間 / 身体の間でパブリックとプライベートが重なり合う / 溶け合うような関係など哲学的な問題をみんなで話す、というような回だったといえるかもしれません。

## 高林

津口さんも、母体に福祉施設がありつつミュージアムを企画・運営している立場として、表に出てくるものと裏にあるものについて考えますか？

## 津口

そうですね。僕は1日の大部分を支援現場で過ごすわけではないんですけど、今の話と関係があるとしたら、展示で扱っている表現が（その裏にある）生活と切っても切り離せないところで生まれてくるということでしょうか。そのようなたぐいのものを扱い理解しようと思うなら、その生活のことを聞かないと、どうしても意味がわかりません。ケアの内容をピンポイントで調整していくことと、作品を見せて伝えるために、つくり手や関係者などと面と向かって一対一でいろいろ話を聞いたり交渉したりすることは、似てる面があるなと思います。

## 高林

作品を見せて伝えるということ津口さんは自分の役割だと思ってやっているのでしょうか？

## 津口

そうですね。もともとはそのような創作物が「好きだったから」というだけのことなんですけど、なんで好きだったのかっていうと、（それを見ていると）自分も含めた人間というものがよくわからない謎の存在だなんて思えて、気が楽になるようなところがあるからです。この世は生きているだけで何かと大変な場所なので、そういうふうに見えることでもないとやっていけないよね、と。あと機能的に言うとならば、誰かの生にねざしたそういう表現を見せて、「こういう形のこういうものを作って何とか生存している」というわれわれ人間の一事例を共有することによって、ちょっとで

も世の中がマシなところにならないかなって思いながらやっているという感じです。「こういうふうにも在ることができるのか!」というような発見への貢献というか。ただ、私たち人間の知られざる可能性をわずかではあれそうしたかたちで世の中に登録し、「私たち」のあり方を編み直していくことが重要であるとすれば、もしかしたら別にものを「見せる」ってことをしないで、聞いて書いて残すというかたちでもいいのかもしれません。とはいえ、「もの」がそこになれば始まらない対話というものも間違いなくあるので、誰かを見ることのできるようにひらいておくことはとても重要だなと感じています。

## 高林

すごい共感するところです。自分たちが生きやすくなるために文化事業で発信してるところはあるかなと思いました。ありがとうございます。次は辻さんお願いします。

## 辻琢磨

こんにちは。辻と申します。多分この中では一番、福祉からは距離感があるかもしれませんが。本業は建築設計をやっておりまして、浜松を拠点に活動をしています。仕事の具体例としては、ちょうどこの建物の正面にある謎のリフト。403 というチームで設計したのですが、上下に動くような仕組みで、何を設計したのかは、まあよく分からないんですけど笑。そもそもレッツさんからよく分からないオーダーが来て、エントランスになんかやってくれてと言われてこうなったっていう。こんなのを設計したりしてます。あとは、個人でも設計事務所

をやっていますし、名古屋造形大学の地域社会圏領域というところでは建築と地域の関係について教えています。来年は「国際芸術祭あいち」というイベントがあるんですけど、そのラーニング部門のキュレーターをやることになりまして、建築というよりは、アートのフィールドに関係ができてきているような気もしていて、今日こういう場に来て大変嬉しく思います。それと、実は昨日まで、インドにいまして、ちょっと胃腸を崩し気味ですね。もしかしたら途中で席をはずすかもしれません。かつ、カルチャーショックも大きくて、それで今日帰ってきてすぐこのレッツの職員の話聞き続けるっていう、心身共にパンパンな状態で、ちゃんと汲み取れてるか分かりません笑。一応、ここまで話を聞いたりして、どういう趣旨のイベントなのかっていうのがちょっとずつ分かってきたつもりでいます。自分の役割としてはトークセッションの翻訳というか、自分たちなりの感じたことを皆さんにお伝えして少しでもインプットを増やすっていうようなことなのかな、と理解しました。

私のセッションは、最初はササキさんですね。ササキさんはいきなり外に出てですね、なぜか焚き火を始めて寒かったんですけど、ササキさんが親しくされていた尾形さんという利用者の方がいたんですが、その人と一緒に焚き火をするのが、すごく良かったと。それで、その尾形さんが、いろいろあって結果的に今、退所をされてしまった。で、ササキさんの悩みとしては、尾形さんともう一回会ったり、コミュニケーションをとったりしたいんだけど、レッツの職員としてはなかなか難しく、

組織の中の人間として接したらいいのか個人的に会ったほうがいいのか、オンとオフをどういうふうに使分けたいのかというような話でした。

参加者の方に、自分とは違う身体を持っている他者から見る世界について研究されている方がいらして、その研究の中で倫理審査というものがあるそうです。リサーチ対象の方を調査して然るべきなのかっていう審査で、プライバシーの問題とか客観性が担保されているかっていう問題があるらしくて。最終的には、その研究者自身を守るような審査でもあるんですけど、そのベースに乗っかっていくと、匿名性が高くなってしまって、個人と個人との付き合いになかなかないようなジレンマがあるとおっしゃっていました。オンとオフの自分なりのスイッチを切り替えたり使い分けるといった話にもなったりしていました。組織の中やルールの中で、この福祉施設という、後の夏目さんとのトークでも出てくる障害者総合支援法という制度の中で向き合わざるを得ないような状況のジレンマが、特にレッツのような場所だと顕在化しやすいというか、上手くハンドリングできないような状況もあるよという内容だったのかなと思いました。

2番目のセッションは見山さんで、3階のシェアハウスの個室で私含め3人と見山さんの合計4人でごちんまり、個室で話すみたいな感じでした。僕、全く見山さんのことを知らなくて、声の出し方が全然最初、あの、なんというか、まあ、変な感じっちゃ変な感じで、普通の喋り方じゃないと思いました。でもとっても美味しいコーヒーを出してくれて利用者の方なのか

参加者の方なのかスタッフの方なのかよくわからなかった。よく聞いてくと、聴覚障害を持たれている方で、去年からスタッフとして活動されているとのことでした。もともと東京藝大で作家活動をされていて、藝大に久保田さんが来られたときに会って、そのままここに入ったと。そんな見山さんの話でしたが、どういうふうにコミュニケーションとったかということ、我々は普通に話すんですが、声を自動的にテキスト化するiPhoneのアプリがあって、それを見山さんが見ながら会話をしました。見山さんは小学2年生までは聴覚があったので発声はできていて。見山さんの問題意識としては、孤独。ご自身が障害を持たれているということなので、それを経験してきたときの孤独感みたいなのがまずベースとしてあると。一方で壮君を見ていると四六時中寝てるときですら、誰かに付き添ってもらっている。だから一見すると孤独ではないのかもしれないけれども、壮君のほうがよく自分より孤独なんじゃないかと。でも、孤独が別に幸せと連動してるかどうかっていうのは分からないんだけど、まあ、孤独なんだろうなというような話でした。あと言語的なコミュニケーションと、非言語的なコミュニケーションがあると思うんですけど、「非言語的なコミュニケーションとは何か」みたいな問題意識をご自身が持たれているとのことでした。作家として活動していくのか、就職先としてここを見つけたのか、どっちなんですかっていう質問には、ベースとしては作家というモチベーションを言っていました。レッツでは大変な仕事でもあるんで、そこに埋没してしまうような危機感が今あるんですとい

う話をされてましたね。

最後の夏目さんは、先ほども少しお話しした「制度」の中でどういうふうにレッツの理念を実装していくかという話でした。夏目さんの中での解釈としては、ここは元々アート NPO で、そのアート NPO が制度を使って福祉施設を始めたというように解釈。なので障害者支援の NPO というよりはアート NPO が先にあって、制度を使って持続可能性を担保するというときの制度が障害者総合支援法であると。じゃあ、そのアート NPO としての理念は何か。最初 2008 年ぐらいに「たけし文化センター BUNSENDU」というものができたときは、やりたいことをやり切ることを応援する場みたいなことを掲げられていて、その後 2014 年ぐらいから、やりたいことがない人も別に居ていいよねみたいな形になっていき、こういう場が実装されてきたということでした。でも、障害者総合支援法を読み解いていくと、基本的には、障害者支援施設というものはもっぱら障害者のために実装されていなければならないというふうに読めると。だから誰でも彼でも入ってきて使えるよということではない。もっぱらという書き方がどこまで解釈できるのか分かりませんけれども、で、この床に緑のテープが貼ってあるんですけど、これより内側は障害者の場所、外側は誰でも入れる通路という形に制度上はなっているそうです。それが、建築的に真面目に読み込むと、「ここに壁が必要で扉があって」というような作り方をするんだけど、「総合支援法をハックする」、夏目さんはそういう言葉を使っていたんですけど、最低限これだけ守ってれば制度上は OK っ

ていうラインを常に探りながら空間に落とし込んだりコミュニケーションに落とし込んだりっていうことを日々やられている。制度を真面目に読み解いていくと、レッツの理念というか、誰でも居ていいよみたいなところと常に綱引きになっていて、夏目さんにとっては 14 年間、ずっとトライ・アンド・エラーしてきたというようなお話だったのかなと思います。

感想としては、私自身は 2011 年に独立しまして、当初は市街地を拠点にしてまちづくり活動のようなことにも携わらせていただいていた中で、直接久保田さんとコミュニケーションをとるという機会は多かったんですが、逆にスタッフの人がどうしているのかを考えて、日々活動されているのかってのはなかなか知る機会がなかったんだなと改めて感じました。今回こういう機会でインプットできると、まあレッツってよく分からない！他者にレッツって何？って聞かれたときになんて答えていいか分からないっていうジレンマはまだ全然消えていないんですが、一応体感としては、今までよりはこういう人たちがいる場所なんだという自分なりの実感は、今までよりも持てましたし、レッツを紹介するメディアとしてこういう形もアリなのかなと。

## 高林

レッツで外の人に仕事をお願いするときいつもジレンマを抱えていて、これは誰の要望なんだろうと思うことがあります。代表の久保田の要望なのか、とか。特に建築について辻さんをお願いするときに、レッツの中でどう意見をまとめたらいかが分からないことがありました。直接いろい

ろなスタッフと話してもらえたらいいのになと思っていたので、今回全員ではないですが、一人ひとりと話をしてもらう機会ができてよかったです。では最後に中田さんお願いします。

## 中田一会

はい、中田一会と申します。私は『福祉をたずねるクリエイティブマガジン「こここ』』というウェブメディアを 2021 年 4 月から編集長として運営しています。『こここ』の合言葉は、「個と個と一緒にできること」です。それが表しているように『こここ』としては、福祉職の方に向けた専門メディアではなくて、一般生活者と呼ばれるような、一見すると福祉に関係ないかもしれない生活や仕事をしながら日々暮らしている方に向けています。福祉の世界を訪ねると、あなたの暮らしや悩みに繋がることがあって、誰にも関わる大事なことなんだということを、カルチャー誌なふりをしたり、時に真面目なメディアのふりをしながら遠回りで伝えていきたいなと思ってるような媒体です。

私の福祉施設体験の初めてはレッツでして、約 9 年ぐらい前に、高林さんが運転をして迎えに来てくださって、「中田さん、福祉施設って初めてですか」というふうにニヤッと笑われたってことや、その次に、久保田翠さんに「中田さん、福祉の現場ってすごく哲学的なのよ。楽しいわよ。」っていざなわれたってのがすごく印象的で、そこからいろいろ繋がりがあって今に至るというような感じです。その出会いに関わるようなお話を今日聞かせていただいたので簡単に振り返ります。

私の最初に参加したトークは高木蒔子さんのトークでした。蒔子さん、モデレーションにするかプレゼンテーションにするか悩みながら、どうやって話そうってウロウロしながら真摯に話していただいて。自分がレッツに入ったとき、初めての障害福祉の現場で「私は福祉のこともアートのことも好きだからきつといい支援ができる」、「きつとみんなが伸び伸びできる場が作れる」と思って入ったら、自分が一番「あれをするなこれをするな」と利用者さんに言ってしまおう。キーッてなってしまうような支援職になってしまったという悩みを話していました。それに対してすごい面白いなと思ったのは、レッツはあるがまますぐに大切にするのを掲げられていますけど、そういうキーッてなってる蒔子さんに対して他のスタッフさんが指導をしなかったという話があって、「あ、蒔子さんはそうしたいんだね。でも蒔子さんがなんでそれ駄目って考えるの？」っていう問いが来て、「え！なんでだろうっ」てなってモヤモヤするっていう調子でレッツの仕事は進んでるよ、なんていう話が非常に印象的でした。支援のことも他にも、福祉のこと、フェミニズム、人種差別に関わることだったりいろいろ考えたことが、いつもいつも自分の中にあるんだけど、考え続けるのはすごくしんどいことで、しんどさの解像度を上げると、寄る辺がないことになって話したことが、すごく印象的でした。「考え続けることは寄る辺がない」。つまり正解がないから、これやっときゃ安心っていうものをいつまでも持てないってことなんだなというリアルな発言に、そうだなって思いました。

二つ目のトークは佐藤さんでした。レッツに勤められて13年目の佐藤さんだったんですけど、ここだけの話ねっていうふうに話していただいた佐藤さんのファミリーストーリーから始まりまして、なぜレッツにたどり着いたのかという、すごく濃厚な話を30分以上伺わせていただきました。考えたのは、「家族にも支援計画が必要なんじゃないかなって思うことがある」とか、「家族だから安心」、「家族だから安全」、「家族の繋がりがみたいなものがあれば生きていける」かっていうと、時に難しいこともあったりする。家族の問題は家族だけで本当に解決すべきかということを考えたりする。それでいうと、たけし文化センターを始め、レッツの活動というのは、久保田翠さんが重度知的障害のある息子さんを持って、さあどうやってみんなで生きてこうか？から始まっている。プライベートを反映しながら進んでいく事業だ、っていうところがあって、「僕もそれをやるべきなのか。翠さんはやってほしそうにしてるけれど、でも、家族のこと考えると全部開けるわけでもないしな」っていうような悩みを話されてたんです。困ったことを共有する、開いて解決していくっていうようなレッツの視点を改めて確認させていただくような、とても面白い時間でした。

三つ目が渡邊さんの話で、幾つかトピックはあったんですけど、アウトサイダーからの脱却っていうのを掲げられていました。テレビ関係のお仕事をされてきたんですが、今、「のヴぁてれび」っていうYouTubeチャンネルの運営とか動画制作をされてるんですけど、「全然関係のない人を巻き込みたいんです」っていう、熱い思いを聞き

ました。だから、どうしたら大衆的なところに自然に無理なくレッツみたいな場の面白みを持ち込めるのかって。「それちょっと中田さんも一緒に考えてほしいことです」って言われて、おお、めっちゃ難しいと思いつながら一緒に話を聞いてました。渡邊さんの実践としては、本格的なクラブDJを呼んで、DJビデオとしてYouTubeで人気があるようなフォーマットに準じた感じで動画を作ったり、ゲーム実況みたいなことを取り入れながら利用者さんの日々に入って、気付いたらレッツのことが気になっちゃうみたいなのをどう作れるかみたいなことを考えてきた。難しいもの扱いされてしまう障害福祉の現場というのにモヤモヤするっていう話が多かったと思います。でも、たまたま毎日通りすがってたとか、ネットで検索したっていう状況で来られた若い方がその場に沢山いらっしやっして、「このなんか謎のテーマ設定とかにすごい魅力を感じたから、むしろ大衆に合わせないでほしい」と。「アウトサイダーのなところになんか惹かれていつか行ってみようと思って今回来たから、もうアウトサイダーのまんまであってほしいという」コメントもあって、外から魅力的と感じられているところと、スタッフとしてはもっと大衆的なところで出ていかなきゃって悩んでいるところの差分が面白いなと思ってお話を伺ってました。

あの、加えてお話してもいいですか？『こここ』というメディアを運営しながら考えてることが何度も何度もグルグルしました。蒔子さんが言う「寄り辺なさ」みたいな話ですが、まさに『こここ』の編集方針の初期に「倫理と遊びと所在なさを大切

にしましょう」と掲げていました。「所在なさ」というのは言葉が悪くなって、最近、「揺らぎを大事に」に変更になったんですけど、正直、所在はないんです。何か正解があると思わずに進んでいくっていうこと。あるいはアートなのか福祉なのかメディアなのかデザインなのか、どこに足場があるかも分からない微妙なメディアを運営するっていうのは、すごい所在がなかったりして、考え続けるっていうことはすごい孤独でもあるし寂しいことでも時にはあるよなっていうことが共有できて嬉しかったです。それと、「関係のない人に届けたい」という話は、本当に全然関係がない人っているのかな？あるいは全然関係ない人に伝わるのかな？っていうのは常に考えていることで、『こここ』の場合は、あと一歩で福祉の領域に行きたいって思う人の背中を押すというのが実はテーマで、全然関係なさそうな位置に居ても、ここが関係あるというのを見つけてきて、そこに接続する企画をどうにかしてできないかななんて考えてたりします。福祉のことを考えたときに「関係がない」「遠い」とか、「実は繋がってる」ってどういうところにあるって言えるんだろうかな？みたいなことを、咀嚼して考えました。

## 高林

ありがとうございます。『こここ』の運営の事と絡めていろいろ考えてもらえて嬉しいです。ゲストトークで全体の話聞いて、障害福祉のサービスの制度だったり、労働契約の制度だったり、家族の制度っていうのがおそらく枠としてあって、その中だけだとどうしても立ち行かないことが

あるんだろうなと思いました。どうしてもその制度の中で何とかしないといけないなと思ってしまふんですが、それだけどうまくいかないんだと思います。今回こうやってトークイベントという形で外の人に話を聞いてもらいましたが、もっと日常の中で、軽い感じで外の空気が流れてきたり、外に知ってもらったり、簡単な言い方なんですけど、つながっている感じができるといいなと思いました。

## アサダ

今日お越しになってる皆さんは、レッツの支援の現場っていうかレッツの日頃の空気感っていうのを知ってる方が多いですかね？普段のレッツのことを知ってる人が、スタッフの声も聞きたいみたいな。あわよくばスタッフが普段何を考えていて、それを広げて聞きたいっていう感じだから、僕の中で勝手に「副音的なイベント」と思いました。現場にはメインとなるコミュニケーション、利用者さんへの支援とかその方々の表現などがあって、そのメインのものが福祉制度によって支えられているってなったときに、その生活の空気感を直接知らなくても、スタッフの方が語ることによって、狭い意味での福祉ということだけじゃないような、広がりのある話を共有する場が生まれるってどういうことなんですかね？なんでそれにみんなが興味を持つのかって考えると、福祉っていわゆる場所が全く違う機能を持つ可能性があるんだよなって、なんか思いました。

## 高林

そうですね。僕も以前は建築とか街づく

りとかの分野にいて、どうしても専門分野でメインの音声が大きくなって副音声がかんどんカットされてってしまう。一方で福祉ってすごい細かいところまで拾おうと思えば拾えるのが面白いなと思って。そこはすごい魅力に感じてやっているところがあります。で、何だろう。それが面白いと思って来てもらえてるのはわからないのですけれど、それはなんかアウトサイダーな考えなのかもしれない。なんかどうしても分かりやすいところに自分自身も行ってしまふみたい。今日も、やっぱ話すとなるとちゃんと話さなきゃってみたいところになってしまふ。うーん。それはそれでいいんですけど。まあ、そんなことを思いながら、うーん、日々、日々、やっていますね。うん。

(一同笑い)

## 中田

寄る辺ない感じになってきましたね。

## 高林

まとめる必要はないんですけど。

## 中田

そう、ね。でも、なんかあの、寄る辺ないんですよ、いろいろ考えてくと。でも、なんでしょうね。入り口は、どこからでもいいなって。ラウンドテーブルで一緒になった方が、毎日毎日レッツの前を通るんだけど、すごい面白そうなんだけど入っていかどうか分からなくて、でも、チラシ見て、これは行っていい日だっていうのを目を付けて、「ここには僕の何か琴線に触れるかもしれない、専門家の人たちが専門

的な話をずっとしてるかもしれない場に身を置いてみたかったです」って言っていました。でも、その「専門」って何の専門かはきくと謎のまんまなんです。そういう入り口もやっぱり良くて。今度、次のタイミングで利用者さんがいる、あるいはこの場にだってレッツの制度的にはそういう立場の人たちも実はいたりするとも思いますし、そのジワジワ出会っていくっていうのもまた面白いなと思いました。いきなり誰でも入れるような大きな入り口をつくるのはすごく難しく、小さな入り口をいっぱい実践されてるのかなと、いつもレッツの活動を見ていて思っています。

## 高林

ありがとうございます。小さな入り口をもっとカジュアルにつくっていけるといいのかなと思いました。今回はちょっと小さな入り口をたくさん集めすぎてこんな感じになりました。あとは交流会で各々話しましょう。

## <ゲストプロフィール>

### 青木彬

インディペンデント・キュレーター／一般社団法人藝と ディレクター。1989年生まれ。東京都出身。東京都立大学インダストリアルアートコース卒業。アートを「よりよく生きるための術」と捉え、アーティストや企業、自治体と協働して様々なアートプロジェクトを企画している。現在は社会福祉士の資格取得を目指して養成施設で勉強中。

これまでに主な活動に「黄金町バザール 2017 Double Façade 他者と出会うための複数の方法」(横浜市, 2017) アシスタントキュレーター、社会的擁護下にあるこどもたちとアーティストをつなぐ「dear Me」プロジェクト(AIT, 2017~2020) 企画制作、まちを学びの場に見立てる「ファンタジア! ファンタジア! 一生き方がかたちになったまち」(墨田区, 2018~) ディレクター、戸田建設株式会社が2025年に開校する学びの場「APK STUDIES」ファシリテーターなど。『素が出るワークショップ』(学芸出版) 編著。

### アサダワタル

アーティスト、文筆家、近畿大学文芸学部文化デザイン学科専任講師(2024年4月より専任講師)。1979年生まれ。「これまでにない他者との不思議なつながりかた」をテーマに、様々な生活現場に出向き、アートプロジェクトの企画演出、作曲演奏、執筆研究を行う。近年はとりわけケア領域での仕事が多く、2019年から3年間、品川区立障害児者総合支援施設「ぐるっば」にてアートディレクターとして勤務。2022年より近畿大学で現職。プロジェクトに「まなざしラジオ!!」(東京芸術劇場, 020 / 展示演出)、「コロナ禍における緊急アンケートコンサート 声の質問 19」(東京藝術大学, 2021 / 舞台演出) など。著書に『住み開き増補版』(ちくま文庫)、『表現のたね』(モ・クシュラ)、『想起の音楽』(水曜社) など。受賞歴に、サウンドプロジェクト「SjQ++」(ドラム担当) でアルス・エレクトロニカ 2013 サウンドアート部門準グランプリ、CD 作品「福島ソングスケイプ」(アサダワタルと下神白団地のみなさん名義) でグッドデザイン賞 2022 など。博士(学術、滋賀県立大学)。

### 津口在五

鞆の津ミュージアム キュレーター / 生活支援員。1976年広島県生まれ。書店員、放課後等デイサービス勤務を経て、2013年に館の運営母体である社会福祉法人 創樹会へ入職。入所施設で働いたのち、現在も館内での創作支援に関わりながら、展覧会づくりにあたる。企画展として『原子の現場』『世界の集め方』『文体の練習』『かたどりの法則』『この出来事』『私物の在処』『きょうの雑貨』『日曜の制作学』など。障害の有無・知名度・プロ / アマを問わず、つくり手の生にねざした独学・自己流の創作的表現に関心あり。

## 辻琢磨

合同会社辻琢磨建築企画事務所代表、403architecture [dajiba] 共同主宰。1986年静岡県浜松市生まれ。横浜国立大学大学院建築都市スクールY-GSA修了後、橋本健史、彌田徹とともに2011年に建築コレクティブ403architecture [dajiba] (以下403)を設立。403として、2014年「富塚の天井」にて第30回吉岡賞受賞、2016年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館にて審査員特別表彰、あいちトリエンナーレ2016出展等、国内外への出展多数。2017年に個人事務所となる辻琢磨建築企画事務所を設立後は、403と並行して、建物や空間の断続的でなめらかな変化をテーマに活動している。2020年から23年まで名古屋造形大学地域社会圏領域特任講師を歴任。現在は静岡県磐田市の建築設計事務所、渡辺隆建築設計事務所の特別顧問も務める。

## 中田一会

マガジンハウス〈こここ〉編集長／きてん企画室 代表。1984年東京生まれ、千葉在住。武蔵野美術大学芸術文化学科卒業後、IT関連出版社、(株)ロフトワーク、(公財)東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京で勤務。2018年に独立し、個人事務所「きてん企画室」を設立。多様な組織での経験を活かし、文化・デザイン・地域に関わるコミュニケーション活動に伴走。企画力と編集力を活かした情報発信や記録設計を手掛ける。2020年後半から(株)マガジンハウスによるウェブメディア「福祉をたずねるクリエイティブマガジン〈こここ〉」の創刊準備に奔走し、2021年4月創刊。編集長としてメディア運営からイベント企画、プロジェクト進行まで多岐にわたる業務を担う。



### 印象に残ったことばを教えてください

- ・ホントの好きって何か。こだわりって何か。
- ・今のようなかたちで、「仕事」としていいのかな。という問い。
- ・なかなか知り合えないのよ。
- ・価値の無いコミュニケーション
- ・Autism
- ・伝えたいけど伝わらない
- ・身体表現が僕には言葉に見える
- ・不健康でいる権利
- ・ぐっときてすぐ忘れる
- ・やわらかい社会をつくりたい
- ・障害者と障害者以外の人
- ・ごちゃまぜの空間を作りたい
- ・ここに自分の居場所があった
- ・孤独
- ・食
- ・家族でかかえきれないことを公開し事業化する
- ・よるべない
- ・自分とは違う身体を持っている他者の方
- ・社会の気持ちを変えていく
- ・ありのままでいられるずるさ
- ・レッツはユートピアではない
- ・福祉はフルスペック→地域に広げられるのではないか

### ご感想をお寄せください

「やりがい」とか「仕事の素晴らしさ」とか「目的」と言ったリクルートのなことでなく「悩み」とか「葛藤」とか「これで良いのかな」と言った人間的なことを共有してくれて、とても興味深かった。  
(30代・アート関係)

忙しいのか、結論を出す効率的な話し合いを求めるのか。怒りの感情をあらわにする人の多く、とても疲れる。モヤモヤの中にいることに耐えられない人が意外と多い。良いことだとは思わない。迷いながら、手探りで進む意味を捉え直してみてもどうか。スタッフの混沌とした思いからの学びがあった。  
(60代・教育関係)

既存の福祉の制度、枠組みをよりよく充実させようとすればするほど障害を持っている方を社会の脇においやることになってしまっていると聞きショックだった。洗練されることを聞きたいと思った。参加者と共にレッツスタッフ双方にとっても刺激がある秀逸なイベントの枠組みだと思った。小学生と障害者の交流は面白いと思った。違いを認めるキッカケになりそうだと思うの枠組みを拡張できそう。  
(40代・建築関係)

少人数で話が出来、フリートークの時

間が沢山設けられているのも、とても良いと思った。何回か開催されたらスタッフ全員の話が聞けるかな?でも今回以上に開催時間が長いと、それはしんどいかも。

(30代・福祉関係)

世の中もっと自由でいいと思うし他人のことを気にしすぎじゃないかと思っています。なんだかとてもキュウクツです…今回初めて「たけし文化センター」に入り「自分の居場所があった」と思いました。長丁場でいられるのか?と不安もありましたが、みなさんのお話とても参考になりました。

(50代・教育関係)

利用者と触れ合うことは強烈な体験だと思うのですが、自分自身に引き付けて考えたり、問いや気づきを生んだりする上では、今回のようにスタッフの皆さんの話を聞くのはよい仕組みだと思いました。またほかの方の話も聞きたいです。

(30代・福祉関係)

レッツではいつもどうしてか考える場面が人それぞれにあり、それは辛い側面もありますが、人としてはよい感じになる時間なのかとも思いました。皆さんのお話をきいて、私たち医療福祉職は自分たちの論理や倫理など専門性を背景に考えており、それは自分を守る手段になっていると改めてわかりました。

(50代・医療関係)

自分の会社の経営方針説明会も、この形でやってみたら(一方的に経営者がパワポで説明するのではなく、会話的、に行

う)社員も参加できるし、有意義な時間になると思った。提案してみます。

(50代・会社員)

ゲストトークでは、①価値の無いコミュニケーション、というワードから、日常での特に生産性の無い雑談や近所の人達でする井戸端会談的なものの中にこそ、気の休まる時間があるのかと想像したり、また、無価値のコミュニケーションを取るに至れるまでの関係性を築く場所・時間も必要なのであろうと感じました。

(30代・寺院関係)

普段仲良くして頂いている方々のお仕事での話を知ることってなかったので、改めて別な一面を知り得ることができ、レッツの利用者さんそれぞれに合わせた関わり方や寄り添い方、また日ごろから考えていることを聞いて優意義な時間でした。

(40代)

お話を通じて、スタッフそれぞれの考えが異なっている一方で、何かつながりや結びつきを感じることができました。異なる考えが寄り集まることで生まれる豊かさを実感し、非常に貴重な体験となりました。

(30代・アート関係)

私はレッツの日常を未体験なのですが、レッツのスタッフの方々が感じているもやもや感だったり課題感、考えていることに触れることができ貴重な体験になりました。あらためて福祉とは何か、を考えるきっかけにもなりました。

(40代・アート関係)

